様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 １８ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８９３３０２

研究課題名（和文）「認知症家族の介護」に備えた中高年男性への介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of intervention program for elderly male for 'care of family with dementia'

研究代表者
長澤　久美子（Nagasawa, Kumiko）

常葉大学・健康科学部・講師

研究者番号：８０５１６７４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、介護経験のない「男性用認知症介護準備プログラム」の開発及びその効果の検討をすることである。全国の認知症家族の主介護者の情緒的消耗・介護肯定感に関連する男性介護者の特徴から、130分2回を1セットの男性用認知症介護準備プログラムを開発した。介入群42名・対照群43名に実施し比較検討した。その結果、参加者の満足度や役立ち感は高く出席率100%であり、認知症の知識や認知症の対応の自信は向上し、2カ月後もある程度定着した。以上より、本プログラムは妥当な内容であり効果があったと判断した。しかし、認知症の否定的なイメージの改善は見られず、今後模擬体験演習等の必要性の示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is development of 'preparation program for care of man with dementia' without caring experience and study of its effect. From emotional wasting of male caregiver for the family with dementia in the whole country and features relating to positive feeling for care, a set of care preparation program twice for 130 minutes was developed. It was conducted for 42 participants in intervention group and 43 participants in control group for comparison. As a result, the satisfaction level and useful sense of the participants was high and attendance rate was 100%. Also, the knowledge of dementia and the confidence of response for dementia improved and were rooted even after 2 months to some extent. In conclusion, we determined that the content of this program was appropriate and was effective. However, improvement of negative image of dementia was not achieved and needs of simulated experience exercises in the future were suggested.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症　家族介護者　介護準備プログラム　男性

## １．研究開始当初の背景

総人口に占める高齢者割合の増加（総務省,2013）に伴い認知症有病者数増加が（厚生労働省,2010）見込まれている。

一方、厚生労働省の平成23年国民生活基礎調査では、65歳以上の者のいる世帯の「夫婦のみの世帯」「親と未婚の子のみの世帯」は増加傾向にある。また、平成19年度国民生活基礎調査の同居主介護者の男性（以下「男性介護者」）の割合は、平成22年を比較すると増加傾向にあり、世帯構造を考慮すると今後更なる増加が予測できる。

男性介護者の特徴は、介護の仕方が合理的であるが、悩み等を他人に相談できにくい傾向がある(森 2008、津止2011)。そのため、男性介護者は内にこもりがちになり、それがストレスとなり虐待や無理心中につながる傾向が強い(奥山,1997）。実際高齢者虐待は、H24年には、男性介護者が全体の約6割を占めている（厚生労働省,2013）。

男性介護者の感じる介護ストレスや困難には、家事行為への戸惑い・社会からの孤立・介護の負担感等（森泉,2009）や、認知症家族の介護ではかみ合わない会話・予期せぬ行動からのやり場のない徒労感（高室,2008）を感じ、また経済的基盤の揺らぎが貧困化への引き金ともなりうる(津止,2011)、等の報告がある。しかし反面、自らの成長の実感や満足感を高める（小林,2009)など、肯定的にとらえている報告もある。津止（2011）は、「絶望と希望、負担と喜びが瞬時に想起し交差する両価性にこそ家族介護の特徴がある」と述べており、介護を行なうことで、否定的・肯定的な両側面がもたらされていると考えられる。

一方、介入研究に関しての先行研究では、家族介護者や通所介護職員、地域住民の介護予防等の報告はあるが、介護経験のない男性を対象とした介入プログラムは報告されていない。そこで今回、認知症家族の主介護者の否定的側面である情緒的消耗と、肯定的側面である介護肯定感の関連要因、および男性介護者の特徴を明らかにし，介護経験のない男性を対象に、「認知症家族の介護」に備えた介入プログラム(男性用認知症介護準備プログラム)を開発し、その効果を検討する。

## ２．研究の目的

研究Ⅰ：認知症家族介護者の情緒的消耗・介護肯定感とその関連要因の検討し、男性介護者の特徴について明らかにする。

研究Ⅱ：明らかになった男性介護者の特徴から，介護経験のない男性を対象とした男性用認知症介護準備プログラムを開発し、その効果を検討する。

## ３．研究の方法

１）　研究Ⅰ

(１)研究デザイン：郵送による横断的自記式質問紙調査とした。

(２)対象：認知症の家族(以下、要介護者)を介護する同居の主介護者(以下介護者)とした。

(３）対象者選出方法は、在宅要介護者の情報が多いと考えられる全国の地域包括支援センター(以下センター)1500ヶ所、居宅介護支援事業所(以下事業所)700 ヶ所に、男女介護者各３名の紹介の依頼文を郵送した。紹介了承の返信のあったセンター・事業所から同居介護者に質問紙を郵送し、手渡しを依頼した。調査は平成 26 年 4 月～7 月に実施した。

(４）概念枠組みの設定(図)

先行文献を考慮し、【介護生活の実態】の≪認知症家族への介護の実際≫では、日々≪家事や介護の実施≫をし、≪生活の変化≫を受け入れ生活をしている。そこに関連する要因には、同居介護者の≪介護の動機≫≪社会資源≫≪対処方略≫≪介護観≫や≪介護の意欲≫≪今後の不安≫を挙げた。それらは介護の開始と同時に進行し、【介護生活の反応】として≪情緒的消耗≫や≪介護肯定感≫が生ずると考えた。これらに先行する要因として【要介護者と同居介護者の要因】を位置付けた。

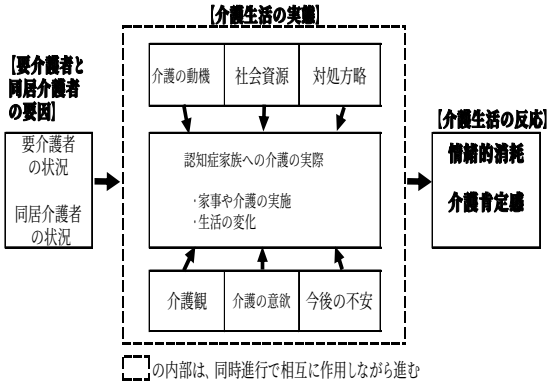


図 概念枠組み

（５）調査内容

【要介護者と同居介護者の要因】【介護生活の実態】【介護生活の反応】計 108 項目の質問で構成をした。その内、使用した既成尺度は、日本版 Short-Memory Questionnaire(SMQ)(Koss,1993;牧,1998),改訂版在宅介護ソーシャルサポート尺度(石川,2007),「家族介護者対処スタイル」尺度（和気 1994)、家族介護 Maslach Burnout Inventory（MBI）尺度(中谷)、介護肯定感（片山 2005）であった。

（６）分析方法：

各設問項目は基本統計量を算出し、t 検定・Mann-Whitney 検定・一元配置分散分析、$\chi^2$検定を行った。次に情緒的消耗・介護肯定感を従属変数、各項目を独立変数でステップワイズ法による重回帰分析を行った。

２）研究Ⅱ

(１)研究デザイン：介入群と対照群における事前・事後テストの準実験デザインである。

（２）対象者：45 歳以上 85 歳以下の護経験がない男性を対象とした。

(３)対象者の選定：①A 市 3 町内の居住者、②A 市社会福祉協議会から紹介を受けた S 型デイサービス担当者及び民生委員、③A 市内の男性中心の活動グループ等から募集した。分析対象者は介入群 42 名、対照群 43 名であった。

(４)プログラムの目標と内容構成

①目標：ｉ）認知症の知識が増える。ii）認知症や介護に対してのマイナスのイメージが少なくなる。iii）認知症の症状や介護への対応に自信が持てる。

②内容：1 回目は認知症の知識・ビデオによる介護食の作り方の視聴と試食・認知症予防体操・自由討議、2 回目は男性介護者講話・ストレス対処法・おむつ交換方法見学・自由討議（2 回目）の内容である、1 回 130 分を 2 回で構成した。

③プログラム実施計画

介入群には、プログラムを実施し、対照群には、認知症のパンフレットを配布し自己学習を依頼した。介入群・対照群とも、介入前(T1)、介入直後(T2)、追跡調査(2 か月後)（T3）に質問紙調査を実施した。データ収集期間は平成 27 年 5 月から 12 月であった。

（５）プログラムの評価

①各回の評価（質問紙）の内容

ｉ）対象者の状況：年齢、職業等 11 項目、

ii）認知症の知識：全 15 項目で、15 点満点で集計をした。

iii）認知症のイメージ：「悲しい」「身近か」等 7 項目を「思う」10 点～「思わない」1 点の 10 段階の VAS 尺度を用い、選択を求めた。

iv）認知症に関連する対応の自信；「物忘れ」「被害的妄想」「イライラ時気持ちのコントロール」等 12 項目を「自信がある」10 点～「自信が無い」1 点の 10 段階の VAS 尺度を用い選択を求めた。

ｖ）介入直後(T2)の感想（介入群のみ実施）：満足の有無、運営の如何等 6 項目について「思う」10 点～「思わない」1 点の 10 段階階の VAS 尺度を用い、選択を求めた。

vi）介入１回目、介入２回目の終了時にそれぞれ印象に残ったキーワードを 3 つ、及び実施項目の理解度、役立ち度の回答を求めた。

②分析方法：介入群・対照群の対象者の比較には、記述統計、マンホイットニー検定、フリードマン検定、及びウィルコクスン検定で多重比較を行った。また、理解度や役立ち感は、記述統計を行った。

４．研究成果

１）研究Ⅰ

（１）本研究の結果では、男女介護者間で情緒的消耗及び介護肯定感への関連要因は異なっていた。男性介護者特有の情緒的消耗の促進要因は、要介護者の「物忘れ」「介護に時間がとられ思う様に仕事ができない」、抑制要因は「リハビリ担当の専門職に相談」「入浴介助」「喫煙して一息つく」であった。また男性介護者特有の介護肯定感の促進要因は、要介護者の「記憶障害（SMQ）」「介護期間(月)」「リハビリ担当の専門職に相談」「病院の送迎」「介護を他人に任せる不安」「仕事を辞めてまでも介護を行う」、抑制要因は「非常勤の勤務」であった。

（２）研究Ⅱへの示唆

男性用認知症介護準備プログラム開発への示唆は、認知症の理解の促進、健康時からの認知症予防や認知症に罹患した後の進行予防伝達、生活のリズムを崩さないための段取りや予測して行う介護方法、いらいら時の気持ちの折り合いやストレス対処法の伝達、安全確保のための介護技術の伝達、の必要性があることであった。

２）研究Ⅱ

（１）プログラム内容について

プログラムの各項目の役立ち感・理解度は、教育介入1･2回目とも平均10点中8点台と高かった。また1回目の自由記述のキーワードのカテゴリーには、【認知症の理解】や【認知症予防】等が抽出され、認知症の理解が進んだことが読み取れた。また2回目の教育介入の自由記述のキーワードのカテゴリーには、【考え方の転換】や【地域交流の必要性】、【要介護者への対応】等が抽出され、認知症の捉え方や対応方法等の理解が進んだことが読み取れた。また、プログラム全体の満足度等も高く、妥当な内容であったと判断した。

（２）教育介入の効果について

①認知症の知識

介入群･対照群の比較では、T1では介入群より対照群が有意に高かった。しかしT2では、介入群の平均得点は上昇し、両群の有意差は消失した。その為、教育介入には一定の効果があったと判断した。

また、介入群のT1・T2の比較では、≪認知症の知識≫おいて、T2で有意に高かった。その理由は、教育介入の効果が考えられたことや、近年認知症の情報がメディアでも多く発信されているため、認知症に関する意識が高まり、興味関心を持って参加したと推察できた。また≪認知症の知識≫の定着について、T2 ･T3で有意差は無く、平均点も低下しなかったことから、介入群では認知症の知識が定着したと判断した。

一方対照群では、T1・T2、T1・T3の比較では、ほとんど変化は無かった。今回対照群にはパンフレットを渡して自己学習を課題としたが、実際にどの程度パンフレットを活用したのか･しなかったのか等の活用方法の確認はできなかった。従って、どれだけの効果があったのかは明確にならなかったと思われた。

②認知症のイメージ

介入群･対照群の比較では、≪認知症のイメージ≫は、7項目中「誰もなる」「恥かしい」の2項目において、T2で介入群が有意に高かった。T1・T3では有意差は無かった。

介入群におけるT1･T2 の変化では、7項目中「誰もがなる可能性がある」の１項目がT2で有意に高く、T1･T3の変化では有意差のある項目は無かった。イメージの変換には時間がかかると思われるため、普段認知症高齢者と関わることの少ない介入群には、机上の説明だけでは限界があると思われた。

③認知症の対応の自信

介入群･対照群の比較は、T1で有意差はなかったが、T2では≪認知症に関する対応の自信≫の12項目中「床上のおむつ交換」「公的用事で依頼」「私的用事で依頼」「認知症に関し

ての連絡柵」の4項目が、介入群において対照群より有意に高かった。

介入群でのT1･T2 の変化は、12項目中「被害的妄想」「暴言暴力」「床上のおむつ交換」「介護食の調理」等10項目がT2 で有意に高かった。その理由は、具体的な場面を提示し、方法等を見学したことや介護経験者の講話を入れたことでより身近な内容として印象付けられたと推測できた。実際、教育介入後の印象に残ったキーワードには「良い印象が残るような対応」「『さっき聞いたよ』の返答はNG」「説得より納得」等の対応方法や、「介護食」・「リラクゼーション」等の具体的なワードも抽出された。従って、認知症の対応の自信については、教育介入の効果があったと判断した。また、T1・T3の比較では、12項目中「暴言暴力」「床上のおむつ交換」等９項目がT3で有意に高い状況であった。そのため、対応の自信はある程度定着したと思われた。従って、継続的に伝達することで更に定着がはかれると思われた。

一方、対照群においては、T1･T2の変化では、12項目中「物忘れ」「被害的妄想」「暴言暴力」等４項目でT2の方が有意に高かった。T1･T3の変化では12項目中「物忘れ」「被害的妄想」等７項目においてT3で有意に高かった。また、対照群の配布パンフレットには記載の無い６項目（具体的な認知症状の対応3項目と介護食の作り方・おむつ交換の方法）が有意に上昇していた。教育介入により介入群の≪認知症に関する対応の自信≫は上昇したが、対照群もある程度上昇した。したがって、介入群の上昇が教育介入による上昇であるかは断定できない。「自信がある」の捉え方は質問時の回答者の心理状況等により変化することや様々な要因が推測できる。今回は、介入群は効果があったと思われるが、今後さらに追及する必要がある。

結論：

本研究では、今回開発した「男性用認知症介護準備プログラム」において、「認知症の知識」「認知症状に関する対応の自信」の効果を確認した。介護経験のない男性を対象とした認知症介護準備プログラムは本邦において未開発であり、認知症高齢者の増加が喫緊の課題となっている現状で、一定の価値を有すると考える。

今後は、「認知症のイメージ」に対する教育内容の検討が必要である。また、介入研究を行う際の対照群の介入方法の検討が必要であると考える。

引用文献：

石川利江:在宅介護家族のストレスとソーシャルサポートに関する健康心理学的研究.pp40-46,風間書房,2007.

片山陽子･陶山啓子:在宅で医療的ケアに携わる家族介護者の介護肯定感に関連する要因の分析.日本看護研究学会雑誌,28(4):43-52,2005.

小林彩：在宅高齢者を介護する男性たちー女性介護者との比較による検討―，臨床発達心理学研究，8: 27-44，2009

厚生労働省（2010）認知症高齢者の現状 http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou_kouhou/kaiken_shiryou/2013/dl/130607-01.pdf

厚生労働省(2013)；平成24年度 高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果. http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000033460.html. 2014年3月21日

Koss,E.･Patterson,M.B.･Ownby,R.et al.: Memory Evaluation in Alzheimer's Disease-Caregivers' Appraisals and Objective Testing. Arch Neurol,50:92-97, 1993.

牧徳彦・池田学・鉾石和彦他：日本版

Short-Memory Questionnaire-アルツハイマー病患者の記憶障害評価票の有用性の検討-.脳神経,50(5):415-418,1998.
Maslach,C.Jackson,S.E.:The measurement of experienced burnout. Journal of Organizational Behavior, 2:99-113,1981.
森泉靖子，小林和美，川野雅資：精神臨床看護検討レポート、認知症の妻を介護する夫の実情；夫の『語り』から男性介護者の支援を考える，臨床看護，35（11）:1689-1694,　2009
森詩恵：男性家族介護者の介護実態とその課題：大阪経大論集,58( 7):101－112, 2008
内閣府：平成 25 年度版高齢者白書. http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/s1_1_1_01.html, 2014 年 3 月 21 日
中谷陽明：在宅障害老人を介護する家族の「燃え尽き」”Maslach Burnout Inventory” 適用の試み,社会老年学,36:15-26,1992
奥山則子：文献から見た在宅での男性介護者の介護，東京都立医療技術短期大学紀要，10：267-272,　1997.
高室成幸：アセスメントの勘ドコロ「男性介護者」編，月刊ケアマネジメント，19(12)： 56－57，2008
津止正敏：特集 ”介護を知る“「介護者を支援する」ということ，月刊国民生活，40：16-19，2011
和気純子,矢冨直美,中谷陽明　他：在宅障害老人の家族介護者の対処（コーピング）に関する研究(2),老年社会学,39：23－34,1994

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）
長澤久美子,荒木田美香子：認知症患者の家族介護者の情緒的消耗と介護肯定感の検討-介護者の性差に注目して-：ウェルネスジャーナル,査読有,掲載予定(2017)

〔学会発表〕（計　３件）
・長澤久美子,荒木田美香子：認知症患者の家族介護者が感じているストレス、-男性介護者と女性介護者の特徴について-第 22 回日本家族看護学会学術集会　2015

・長澤久美子、荒木田美香子：認知症家族を介護する介護者の情動反応の検討－男性介護者と女性介護者を比較して－第 35 回日本看護科学学会学術集会 2015

・長澤久美子、荒木田美香子、長島真由美：男性介護者介護準備プログラムを実施しての内容の検討－参加者の自由記述と理解度・役立ち感の調査から－：第 23 回日本家族看護学会学術集会 2016(発表予定)

６．研究組織
(1)研究代表者
長澤　久美子（NAGASAWA Kumiko）
常葉大学・健康科学部・講師
研究者番号：80516740

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：